CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.130　April, 2016

目次

〈アジア太平洋研究センターからのお知らせ〉 1

〈CAPS主催企画の報告〉
連続ドキュメンタリー映画上映会
『ギフト』『ラダック　それぞれの物語』
東京大学大学院博士課程　北山 敏秀 2

書評会「傷・身体・反暴力の政治思想
――岡野八代の著作をめぐって」
沖縄国際大学講師　村上 陽子.....3

ワークショップ
「版画美術運動の現在　マレーシア・キナバル山の
ふもとから パンクロック・スゥラップを迎えて」
CAPS特別研究員　上原 こずえ 4

特別セミナー：
The economic impact of immigration: the case of Italy
招聘外国研究員　Ivan Etzo 5

書評会「沖縄研究の現在　村上陽子著『出来事の残響：
沖縄文学と原爆文学』に触れながら」
一橋大学大学院　松田 潤 6

「変化なし」というダイナミズム：
復刊記念シンポジウム　「戦後日本語文学と
金石範『火山島』」　に参加して（下）
一橋大学言語社会研究科　申 知瑛.....7

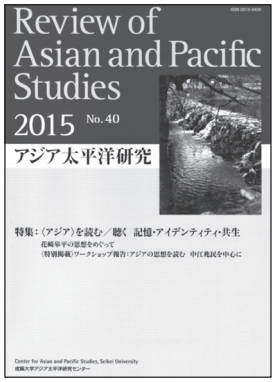
〈共同研究プロジェクト紹介〉
認知言語学の新領域開拓研究
― 英語・日本語・アジア諸語を中心として ―
CAPS特別研究員　長谷川 明香 9

〈書評〉
ランス・フォートナウ著
『P≠NP予想とはなんだろう』
理工部准教授　山本 真基 10

〈CAPS研究員 研究内容紹介〉
リスク社会における社会的不平等の行方
CAPS客員研究員　川端 健嗣..... 11

〈アジア太平洋研究センター（CAPS）活動報告〉 12

アジア太平洋研究センター（CAPS）からのお知らせ



2015年度CAPS紀要『アジア太平洋研究』40号が刊行されました

本センターの紀要である『アジア太平洋研究』40号がこのたび刊行されました。「〈アジア〉を読む／聴く　記憶・アイデンティティ・共生」という特集タイトルで、本センター主催の講演会とワークショップの記録も収録されています。

40号を機に、表紙デザインも新しくなりましたので、ぜひお手にとってご覧下さい。

2015年度の企画が無事にすべて終了しました（詳細は2頁から）

書評会「沖縄研究の現在　村上陽子著『出来事の残響：沖縄文学と原爆文学』に触れながら」（報告は6頁に掲載）。左上より小野百合子氏、崎浜慎氏、村上陽子氏、土井智義氏、持木良太氏、右は松田潤氏。

（上）ワークショップ「版画美術運動の現在」（報告は4頁に掲載）に合わせて6号館6階ロビーにて開催された、版画の展覧会

CAPS主催企画の報告

連続ドキュメンタリー映画上映会『ギフト』『ラダック　それぞれの物語』

東京大学大学院博士課程　北山 敏秀

アジア太平洋研究センター主催の「連続ドキュメンタリー映画上映会（第6回）」が、2016年2月17日に開催された。今回上映されたのは、奥間勝也監督による二つの作品、『ギフト』(2011) と『ラダック　それぞれの物語』(2015) である。いずれも、山形国際ドキュメンタリー映画祭（「アジア千波万波」部門）において上映された作品だ。

『ギフト』は、伝統文化として継承されてきた墓地が、那覇市若狭地区の再開発工事によって取り壊されるという事情を背景に作られている。過渡期の街にひっそりと佇み、そして取り壊されようとする墓（これは監督自身の祖母方の墓である）をめぐって、物語は、「継承」とは何かという問いを軸に進められる。

映画には、血縁者である祖父をなくした「ヨウスケ」と、「ホームレス」である「亀ちゃん」（亀ちゃんは監督の友人でもある）が登場する。「ヨウスケ」は、「お墓にはいろんな人がいるんだよ」といったような、記憶を下地にした「亀ちゃん」の言葉を受け取りながらも、自らの眼で街を見、考え、学んでいく。そうした「ヨウスケ」の姿を通して、墓という伝統的な血統による「継承」のあり方とは別の、血統のない「継承」のあり方を、物語は模索していく。家の玄関でランドセルを放り投げ、外に飛び出していく「ヨウスケ」の姿が印象的だった。そのランドセルを、フレームの外から伸びてくる誰かの手が拾い取る。この場面を、学校教育を通して教えられたことを学び捨てる衝動の表現だと言えば、単純化しすぎだろうか。そのあと「ヨウスケ」は、リュックを背負い、水筒を提げて街を歩き進む。その「ヨウスケ」の姿が、物語が抱える問いの強さを現しているように見えた。

一方の『ラダック　それぞれの物語』も、「継承」とは何かという『ギフト』の問いを共有している。この映画は、北インドのラダックに伝わる、世界一長い物語とも言われる「ケサル物語」について調べる二人の少年を軸にした物語だ。しかしこの映画は、舞台となる村には「ケサル物語」を覚えている人はほとんどいないという事実との格闘でもあった。学校や農作業、軍隊での仕事があるために、話す人がいなければ聞く人もおらず、子供たちに伝える機会がなくなっているという状況が、インタビューを通して映し出される。

インタビューのさなか、一人のおばあさんが意気揚々と歌い出す。しかしその歌が「ケサル物語」とは関係がないことが、カメラの外からの声によっておばあさんに伝えられる。この映画が興味深いのは、その、「ケサル物語」についてよく覚えていないはずのおばあさんに、ドラマ場面では、子供たちに「ケサル物語」について伝えようとする大人の役が与えられていることだ。そうした、おばあさんの戸惑いも見て取れるインタビュー場面から、ドラマ場面への移行を、映画はしっかりと捉える。「継承」するということが、ひとりひとりの話者にとっての物語を語ることと密接な関わりを持つことが、鋭く突きつけられる。

映画上映後には、10年来の付き合いであるというキュレーターの岡田有美子氏と監督との対話も行なわれた。奥間氏自身が岡田氏との対話の中で率直な印象として語っていた言葉によれば、「周縁性」や「戦争の記憶」といった共通項を介して、沖縄とラダックという場所は「似ている」。しかし、似ていながらも、「決定的に違う」とも監督は語った。「決定的に違う」場所が、偶然性を多分に含んだドキュメンタリー製作の体験を通して繋がっていくという、おそらくは意図せず訪れた感覚に、監督は触れたのではないだろうか。そして今も、その感覚への問いは、奥間氏の中に生き続けているのではないかと思う。

今回の上映会は、監督である奥間勝也氏の映画を作る眼と、岡田有美子氏と監督との対話、さらには上映会終了後における、鑑賞者と監督との酒を酌み交わしながらの自由な意見交換を通した、二つの異なる場所を繋ぐことへの思考を刺激する、手探りの、しかしだからこそ力強い試みであったように感じた。

書評会「傷・身体・反暴力の政治思想――岡野八代の著作をめぐって」

沖縄国際大学講師、前CAPS特別研究員　村上 陽子

岡野八代氏（同志社大学）は『フェミニズムの政治学――ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、2012年）においてフェミニズムの立場から公私二元論を徹底的に検討している。「自律的主体」によって隠蔽される「ヴァルネラブルな存在」を政治学の基礎単位とし、ケアの倫理を私的領域から公的領域に開いていく本書は、他者との非暴力的な関係からはじまる政治のあり方を提示してくれる。そのような岡野氏の思想は過去十年の論文を一冊にまとめたという『戦争に抗する――ケアの倫理と平和の構想』（岩波書店、2015年）にも通底している。こちらは単に過去の論文の蓄積に留まらず、立憲主義と民主主義というテーマをそのときどきの政治状況の中でつかみとろうとする実践に満ちた一冊となっている。

2月22日に開催された書評会は、このかけがえのない2冊をめぐるものであった。五野井郁夫（高千穂大学）、三浦まり（上智大学）、林みどり（立教大学）、趙慶喜（聖公会大学東アジア研究所）の各氏の報告を受けて著者が応答するかたちをとったこの会では、深い読みと真摯な問い、熱のこもった応答が交錯した。

まず、『戦争に抗する』の評者として登壇した五野井氏は、昨年度末に新聞紙上で本書を紹介したときの「テロとの戦争、「慰安婦」問題、改憲まで、立憲主義と平和主義を切り捨てようとする政治に抗して、非暴力の平和思想を説く。今後の指針となる一冊」（『東京新聞』2015年12月27日「2015年　私の3冊」）というコメントを紹介し、「この10年間の世界政治と日本政治の変遷を俯瞰し、進むべき方向を示す力作」と位置づけた。五野井氏は、立法以前にすでに存在する不平等に目をつむったままでは不正義の構造が隠蔽されてしまうという岡野氏の指摘を踏まえ、政治学史の磁場と問題点の見直しを行なった上で「慰安婦」問題の不正義をどう正すかという大きな問いについて考察を重ねた。

三浦氏もまた、「慰安婦」問題から語り起こし、責任を問うということについて議論を突き詰めていった。本来集合的責任を問うことは自分の責任を問うことにほかならない。しかしそれは、自己責任論の枠内では語られず、自己責任という名において他者責任免除、すなわち責任放棄が行なわれてしまう。この無責任の構造の前で、法が正義を成し得ないとすれば、何をすれば無責任構造が崩せるのか。そのような問いが著者に向けられた。また、「慰安婦」問題とは日本政府が被害者から赦されることではなく、不平等な関係を平等な関係へ是正していくことだと論じられたことが印象的だった。

ついで『フェミニズムの政治学』に焦点が当てられた。まず、林氏が2002年からの岡野氏の仕事をたどり直し、『シティズンシップの政治学――国民・国家主義批判』（白澤社、2003年、2009年増補版）が発刊されてから増補されるまでの時間において、国家と個人の関係性が前提とされるシティズンシップという制約から「ケアの倫理」へというが岡野氏の中での視点の移動があったのではないかと指摘した。さらに、「自律的な自立した主体」を批判することを通して人間の根源的な受動性のなかに可能性を見出そうとする政治学へと進む岡野氏の軌跡が鮮やかに示された。

趙氏は本書全体の見取り図を描きつつ、シティズンシップや包摂や承認に基づいた政治は抑圧と支配の関係から自由になることはできないため、市民の権利ではないものとしてあらためて人権を思考するという本書の結論に基づき、自立と依存、傷つきやすさについて考察を進めた。人権の不可能性を見せ付けられる「荒野」から平和の構想をはじめるための導きの書として本書を捉える読みに、この困難な時代をともに切り開く視座を感じた。

岡野氏のリプライは一人ひとりの評者の報告に対する深い喜びがあふれるものだった。正義論やフェミニズム理論を手放さず、不正義を追求する言葉にどう応えていけるのか。誰もが脆弱な立場に立ちうるこの社会の中で、傷つきやすい存在として未来を手繰り寄せるための言葉が重ねられていった。

［左から、趙慶喜氏、
岡野八代氏、五野井郁夫氏、
三浦まり氏、林みどり氏］

ワークショップ「版画美術運動の現在　マレーシア・キナバル山のふもとから パンクロック・スゥラップを迎えて」

CAPS特別研究員　上原 こずえ

アジア太平洋研究センターでは、2016年2月28日日曜日にワークショップ「版画美術運動の現在 マレーシア・キナバル山のふもとからパンクロック・スゥラップを迎えて」を開催した。今回招聘したのはマレーシア最東に位置するサバー州の版画コレクティブ、パンクロック・スゥラップ（Pangrok Sulap）のアーティスト、リゾ・レオン（Rizo Leong）さんである。

ワークショップに先立ち、版画展示は26日から開始した。リゾさん、そして今回のコーディネーターを務めた徳永理彩さんが現場での展示を始めた。数々の版画ポスターと大判布版画が無機質な会場を暖かみのあるアート空間へと変化させた。

リゾ・レオン氏（上）
細谷修平氏（右上）
山崎雄史氏

パンクロック・スゥラップの活動拠点であるサバー州が直面する問題は、開発や貧困など深刻なものばかりだが、「わが故郷サバー」「戦争ではなくビーズを作ろう」「知識は無償だ」など彼ら、彼女らが発信してきたメッセージはいたってシンプルだ。しかしだからこそ、その力強さはサバーを越境して人々の心に響いてきたのだろう。私自身も「海はいのち」という一つの作品から、1970年代の沖縄島中部で石油備蓄基地建設に反対した安里清信の「海はひとの母である」を思い起こしていた。

そして迎えた28日のワークショップは戸加里康子さんの通訳を介して行われた。リゾさんははじめに、版画制作の場、そして今日のこのワークショップが“出会いの場”であり、交換する、共有する、共に学ぶことを大事にしたい、と期待を込めて言われた。パンクロック・スゥラップが活動をはじめたのは2009年、「買うのではなく自分で作ろう（DIY）」の精神で、孤児院や少年院で子どもたちの散髪やTシャツの制作・販売などの活動をしていた。そして版画制作をはじめてからは、アートが教育における重要なメディアであると捉えるようになり、一つ一つのプロセスに楽しみや意味を盛り込んだ。例えば大きな作品の場合、彫った版木に絵具を塗り布紙を敷いた後、裸足でステップを踏み歌を歌いながら摺り上げる。作品を感じてもらうためだという。

そしてリゾさんは参加者からの質問に応える形で対話をはじめた。版の材質は何か？メンバー間での民族や宗教について意見交換はあるのか？多岐にわたる内容であったが、ある参加者が版画を作る時の歌の内容について尋ねた。この質問に対し、リゾさんは次の歌を歌ってくれた。農業をして／質素な生活をして／自然と仲良くしよう／灼熱の暑さも友達にして／雨が降ればそれは良いしるし／畑は水に濡れるし／森では新しい芽が出てくる／全ての人たちは特別で／貧しい者もみな同じものを持ち／共に農業をしている･･･。会場の皆がそのメッセージに聴き入っていた瞬間であった。

リゾさんのトークの後、ディスカッサントの細谷修平さん（美術・メディア研究／映像作家）は、韓国の民衆美術運動について多数の写真や映像を紹介しながらお話くださった。1980年代、民主化を求めた政治運動のなか展開されていった美術運動。社会状況について話し合いながら創りあげる版画制作は社会に向き合う「学びの場」であり、そして闘争を奮起させた民衆美術は、厳しい状況のなかで人々がみせる表情の豊かさを捉えてきたという。続いて山崎雄史さん（環太平洋社会運動史研究）はロサンジェルスにおけるアートとの出会いについてお話くださった。メキシコ系移民農業労働者の生活、移民労働者に対する制度的な弾圧・暴力への抗議をテーマとするアート作品からは、日系移民、沖縄系移民の文学・政治運動にもみられる歴史意識、階級意識の越境を読みとることができるという。

この日はA3BC（反戦・反核・版画コレクティブ）関係者の方々をはじめ、各地で活動を展開するアーティストや批評家の方々も多く参加されたが、最後まで進んで撤去作業を手伝って下さった。リゾさんが最初に期待を込めて言われた出会いや交換、共有がこの場を通じて生まれたのだと思った。このワークショップをともに創りあげてくださった皆様に感謝したい。

特別セミナー：The economic impact of immigration: the case of Italy

招聘外国研究員　Ivan Etzo

During my visiting fellowship at CAPS, in March 2016, I had the opportunity to give a lecture on the economic impact of immigration in Italy, which took place at the Seikei University on March 2nd. As it is well known, migration represents a hot topic in Europe, the 31.3% of international migrants live in Europe and Italy represents one of the main European destination country. The first part of the lecture introduced some basic concepts related to the economics of immigration and the definition of different types of immigrants. At this regard, the audience seemed to be particularly interested in the difference between refugees and asylum seekers, probably influenced by the current refugee crises in Europe. When I introduced the prevalent economic view of migration as a human capital investment and the migration decision as an individual investment decision a faculty member fairly asked whether migration could also be a household decision. In fact, migration is a complex phenomenon and the decision whether to migrate or not depends on a wide set of push and pull factors. The *push* factors are those factors which push people to leave their country of origin (i.e. they refer to the origin country). These factors can be either economic factors like high unemployment rates, low wages, high taxes, poverty or non-economic factors like a civil war, violence, crime, and religious persecution. Every push factor has the corresponding *pull* factor, which refer to the destination country (e.g., low unemployment rates, high wages, etc..). Obviously, in some cases these factors might affect not only the single individual but her whole family, thus the decision whether to migrate or not is taken at the household level. In the second section of the lecture I showed the patterns and trends of foreign citizens resident in Italy. Italy has a long tradition as a sending country, but it is only during the eighties that it started to be an important migrant-receiving country. The number of foreign citizens almost doubled during the period 2004-2010 reaching 4.5 m in 2010 (5 m in 2014). In the last part of the lecture I talked about the economic impact of immigrants in Italy. It is a common belief that immigrants harm the hosting society, thus I started from the main stereotypes and then showed whether the research findings agree or not with that particular belief. I showed that studies for Italy and other European countries do not support the belief that immigrants represent a burden for the welfare system. According to the 2009 European Social Survey, on average 50% of European native citizens see immigrants as competitors for job, but the vast majority of the empirical research find that immigrant workers are complementary rather than substitute with natives. At this regard, one question was about the possibility that after a long period immigrants could integrate in an almost perfect way so that they become substitute with natives. Even if this might be a possibility, the integration process should lead to immigrants being accepted in the society, together with their cultural diversity. In this way immigrants keep their original valuable skills. Another question was about the possibility to identify a threshold in the immigrant population share above which the net economic impact of immigrants turns negative. This might be an interesting topic for future research, in particular at city level where unexpected and high immigration flows in the short period could make the negative effects related to crowding population to offset the positive ones. The last question was about another common belief, that is the relation between immigration and crime. Again, the vast literature on this hot issue strongly reject the causal relation between immigration and crimes. I ended the lecture pointing out that according to the main research findings, and contrary to the common stereotypes, immigrants represent an important asset for the hosting economy. Therefore, more efforts are needed in terms of better integration policies. The role played by the mass media is also crucial in order to fight the common negative stereotypes.

書評会「沖縄研究の現在　村上陽子著『出来事の残響：沖縄文学と原爆文学』」に触れながら

一橋大学大学院　松田 潤

戦争、被爆／被曝、集団自決、軍事占領、レイプといった破壊的な「出来事」を主題とした小説を論じるにあたって村上陽子氏が『出来事の残響』で採用した方法は、意味や解釈をまずは排して、主体ならざるものたちの発する証言とはなりえない「音」を「聞く」という読みの実践であった。そうした姿勢が、沖縄文学と原爆文学という日本文学領域で個別のジャンルとして周縁化された上で位置を与えられていた小説群を、範疇化に抗して読みなおす地平を切り拓いたと言えるだろう。本ワークショップの発表者4人も、専門領域は異なりながらも、村上氏の仕事への応答を通して、再び自らの研究領域および創作活動を批判的に問い直す視座を提供してくれていたように思う。

はじめに近代沖縄の資本主義史を研究している持木良太氏は、近代化によって移動を余儀なくされた人々を包摂する資本の動き（本源的蓄積）を本書で取りあげられた小説作品の登場人物にも見てとり、「資本と軍事の移動線の上の者たち」として描かれていると指摘した。またこうした資本・軍事的暴力による抑圧は「狂気」を生きる者たちを生み出すとし、小説にもその力学を丁寧に読み取った上で、原発事故後という現在を踏まえて書かれた本書における現状分析の弱さと、「狂気」の者を抵抗主体とみなさない読みのあり方について疑問が出された。

次に小説家の崎浜真氏は、作家としてこうした場で「語らされる」ことへの躊躇を表明しつつ、沖縄における創作と継承について、「ことば」や「ものがたり」や「沖縄文学」という枠組みを疑ってみるということを提起した。また小説家の崎山多美の初期三作を貫く「継承」というテーマを論じ、死者からの呼びかけに何らかの代償（根源的暴力性）を伴いつつ何かを受け取ってしまっている能動的･主体的ではない継承のあり方と、本書の「聞く」という構えとの重なりを見出した。そうした継承は一つの倫理であると述べられていたことが非常に印象的であった。

休憩をはさんで報告された小野百合子氏は、戦後日本（本土）社会における「沖縄返還運動」を研究している立場から、1950年代に「沖縄返還運動」に取り組んだ青年たち（日本青年団協議会）の逡巡や葛藤に分け入り、「われわれの自身の問題」として沖縄の状況に向き合おうとした人々の声を多くの史料を用いて紹介することで、国家や国民の枠組みとは異なる回路で「当事者性」をいかに獲得していけるかについて考察した。また村上氏の言う他者の痛みの分有困難性に着目し、「沖縄問題」への「負い目」を感じること自体が出来事に巻き込まれ、呼びかけに応えるための別の回路を拓くと述べた。

最後に土井智義氏は、自身が近年考究している米軍統治期琉球列島における「非琉球人」の研究のうち、「外国人」問題の嚆矢である1950年代前半の「日本人建設労働者」の移入・送還政策について報告した。人口としての「米軍要因」と「琉球住民」、そして強制送還によって調整可能な労働力としての「外国人労働者」が相互的に構成され、帝国的経済圏内でどのように差異化され組み込まれていったかを明らかにした。また村上氏の用いた複数の「渦」のせめぎ合い、それを結節する「回転」「回路」というイメージに着想を得、歴史記述における過去と現在双方から自律する「回路」の創出の必要性を説いた。

村上氏からは各報告者への丁寧なリプライがあった。とくに論文を書いている最中は現在の文脈に「激しく身体を揺さぶられてしまう」が、「文学を自分に引き寄せるのではなく、自分が文学に寄っていきたい」というコメントは、「出来事から生まれた言葉の渦の間」に自らを投げ入れていくという本書で示された読みの実践と深く通底するものであり、文学を素材や批判の道具としては読まないという村上氏の文学に対する真摯な姿勢が窺われた。

コメントを務めた筆者は、本書においては明示的ではないが、「出来事」「潜在性」「分有」「傷」「痕跡」「被傷性」といった語彙の使用に深い水準での理論的テクストへの応答が読み取れることを指摘した。

登壇者の発話に触発されるように会場とのディスカッションも熱を帯び、ことばが共振する時間となった。他者への応答という本書の方法とも呼応する本ワークショップを通して、沖縄研究の水準の深まりを実感したと同時に、李静和所長が最後に述べられたように、沖縄研究の新たな形式も発明されたように思う。

「変化なし」というダイナミズム：復刊記念シンポジウム「戦後日本語文学と金石範『火山島』」に参加して（下）

一橋大学言語社会研究科　申 知瑛

（承前）最後に詩人の金詩鐘さんの研究者でもある呉世宗さん[1]は、金石範の文学に潜んでいる負い目としての「闇」、その存在・変形・潜在性について語った。4.3を経験した金詩鐘さんとは違って、金石範さんは自分が4.3を経験しなかったということから文学を始めている。金石範さんにとっては、事実を現実に存在させるためにこそ、それが「虚構」であることが大事で、そこから日本語という侵略者の言語を通じて朝鮮的なものを表現できるのかという問いへと進む。このような「虚構の世界の構築と普遍の間に到達すること」の間には距離があり、そこに「闇」がある。呉世宗は、「闇」の様子を四つに分けて語る。①「闇」は虚構的世界を構築することを拒む障壁であり、それと同時に普遍性へと向かわせる潜在性の場であり、世の中を客観的に見るようにさせる装置でもある。この闇は4.3を経験しないまま書く時の難しさであり、金石範は文献を集めることで空白を開いていく。②五感を強調し「闇」をかき分ける意志をみせるが、これがまさに、「なぜ日本語なのか」ではなく「なぜ書くのか」という問題と繋がる。③主人公たちの間にある思想的かつ空間的な距離であり、連帯の不／可能性を表現する。そして「闇」は連帯と解放への問いとなり、彼方から何かを到来させるものであり、それと同時に完全な合致を拒否し不和をもたらすものでもある。④4.3の出来事を反響させ、他の出来事（光州抗争、3・1独立運動／李良枝のような若い在日朝鮮人作家／アルジェリアや沖縄の作家）と繋げる連帯のエコーである。

各者の報告に続いて行われた討論は、三つの論点を中心に展開された。一つは「日本語文学」が文学の基本前提（国家、原本とコピーの区分、単一言語など）に問いかけ、新たな文学表現を生み出す可能性である。二つ目は、記憶の「他／自殺」で忘却されたものを「夢」を通じて甦らせる、金石範文学の「幻想的リアリズム」である。佐藤さんが「記憶を失った人は十分に生きているのだろうか」と問いかけたように、もしかすると記憶を失った人々は幾つかのアクチュアリティーを同時に生きているのかもしれない。この論点は「闇からあらわれる証言」（李静和さんの表現）と結びつけられ、「闇」についての議論へと運ばれていった。野崎さんが例として挙げてくださった死体の目玉ではなく「闇」を食う鴉のイメージから、鵜飼さんが上述の東国大でのシンポジウム（鵜飼さんはそこでの報告者の一人だった）でのある参加者の言葉を引用した、韓国歴史教科書の国定化は「開かれたものを再び闇へと戻す」というイメージまで、「闇」が示してくれる範囲は豊かで広い。呉世宗さんは、金石範さんの小説における「闇」のイメージには、否定的なものから徐々に肯定的なものへと変化するきっかけがあると述べた。さらに鵜飼さんは、闇と関連して金石範文学の「動物」のイメージは第3世界文学との繋がりとして語りうるとした。実際に金石範さんは1970年のアジア・アフリカ作家会議を通じて第3世界の作家たちと出会い、1974年にはパレスチナの詩人とも交流があったという。金石範文学と第3世界文学との関連性は「済州4.3平和賞」のもう一人の受賞者、ムハマド・イマム・アジズ（Muhammad Imam Aziz）さんを想起させた。彼はインドネシアのNU. Nahdlatul Ulamaの全国理事会の議長で、インドネシアの軍事政権が共産主義者の排除を唱えて1965～66年に50万名を虐殺した事件の真相究明と国民統合に寄与した方である。金石範さんが第3世界の作家と出会えたという意味は、アジアおよび第三世界が共に持っている、このような歴史経験の共通性（植民地としての経験、独立してからの軍独裁と赤狩りと虐殺、それを背後で指示・支援したアメリカの存在、内戦など）を可視化する。金石範さんの言葉を借りると、「外部から警官を呼ぶ」という、忘れ去ってしまった

[1] 呉世宗『リズムと抒情の詩学―金時鐘と「短歌的抒情の否定」』生活書院、2010。

記憶である。

2部を開いたのは、『火山島』の韓国語への訳者の一人、金煥基さんの挨拶だった。彼は、韓国で翻訳版『火山島』が多くのの文学者の関心を集めており、一週間で20セットが売れたと報告した。続けて、朴景利の『土地』、黄晳暎の『張吉山』、趙廷来の『太白山脈』など、韓国文学史の長編小説の系譜の中で空白であった戦後直後の状況を書いたものとして『火山島』を位置付け、「韓国文学史の空白を埋めた」と語った。そして、金石範のディアスポラ文学は韓国と日本社会のアンチテーゼとして存在し、越境的かつ普遍的な文学の価値を持つと主張した。彼が韓国文学史の代表的な長編小説として挙げた作品はいずれも抵抗的な民衆のエネルギーを表現している。そのエネルギーは「韓国人」という枠を越えて氾濫しているものである。いかにすれば、これらの長編小説から「韓国の民衆」とは呼ばれえなかった無名の存在の発見が可能だろうかと問う時に、『火山島』には韓国文学史の空白を埋めると共に、「韓国文学史」の根拠を問いかける力があるとの期待を抱く。また、翻訳者たちの長い間の苦労と粘り強い意志に感謝と賛辞を送ると共に、韓国文学と韓国語内部のさまざまな位階についての問いが本格的に始まらなければならない地点に、私を含む韓国文学研究者たちが直面しているのではないのかと思った。

［金煥基氏（左上）、金石範氏］

このような焦りと恥ずかしさが混ざった状態で金石範さんの講演を聞いた。その繊細な言語使用に惹きつけられながら、正しく呼称することを強調する彼の言葉が強く感じられたのは、そのためである。金石範さんは豊臣秀吉の行為は「朝鮮征伐」ではなく「朝鮮侵略」であり、「琉球処分」でなく「琉球侵略」だと言い切った。 歴史や国家的な境界をもって判断する以前に、一つの島や村に外から軍・警察が入ってくるのは、その島や村の人々には侵略であるということだ。済州もそうである。そして、この侵略の本拠地である「日本」へと「亡命」するしかなった東アジアの冷戦構造の中で、日常的に戦いながら作られたのが金石範さんの亡命文学であり、彼の日本語であり、彼が語る沖縄との繋がり――不／調和しながら続く――の可能性である。無数に異なりながら無数に重なっていた、当日のシンポジウムに集った人々のように。

「戦後」／「解放」／「光復」70年の今年、韓国ではさらに9名の元日本軍「慰安婦」ハルモニが亡くなったと報道される。徐々に証言の当事者が消えていく「変化」の中で、以降の歴史記述と表現の言語はどのようなものになるべきか。今日の友人を昨日の友人と言わなければならないようで怖くなっていくこの頃、金石範／キムソクポム／김석범／キンセキハン／긴세키한…さんは90年の時間を変化なき場所にいることで、世の中を変化させ未来の友人と出会える場所を作ってくださったと思う。その「変化なし」のダイナミズムに心より感謝する。

最後に二つのエピソードを書いておきたい。一つは、金石範さんが「済州4.3平和賞」の記念講演で言及した、「4・3平和記念館」にある「白碑(Unnamed Monument)」についてである。これは4・3の真実を語ることが出来ない暴力や抑圧が続いているということを見せるものであり、その語られない無数の存在と記憶することさえ恐ろしい経験を想起させる、闇の中に渦巻いている動物のようだ。金石範さんの作品の場所は、その白碑と似ている。もう一つは、この日に久しぶりに出会った在日朝鮮人2世の先言葉だ。「『火山島』が韓国で翻訳されてあんなにたくさん売れたなんて、本当に嬉しいです。本当に嬉しい。だけど多少は心配にもなるよ」。『火山島』が持つ在日朝鮮人の歴史を背景にした特殊性と抵抗性が、韓国でうまく理解できるのか、しなやかなものになってしまうのではないか…などなど、私としては見当の付かない在日朝鮮人の1世と2世が背負ってきた悩みが感じられた。このような無数なズレを感じ語り思考し表現し記憶できる空間が、金石範さんの文学をめぐる今回のシンポジウムで開かれていたと思う。そして、この巨大な希望と巨大な恐れの間に開かれている「闇」が、あまりにも明るい。

本稿は、2015年11月8日に行われたシンポジウムの報告の後半部分です。前半は、本紙129号に掲載されています。

共同研究プロジェクト紹介

認知言語学の新領域開拓研究― 英語・日本語・アジア諸語を中心として ―

CAPS 特別研究員　長谷川 明香

認知言語学は、N. Chomskyによって創始された生成文法と対立する枠組みがいくつか集まって1980年代後半に成立した比較的新しい言語理論である。その大きな特徴は、ヒトのもつ言語能力（の習得・起源を含む）を、ヒトの認知能力全般と密接不可分な関係にあるものとみなすことである（対する生成文法では、言語能力はより一般的な認知能力から自律したモジュールを成していると考える）。そのため、ヒトが世界とどう関わり事態をどう捉えているかということが決定的に重要となる。また、その事態把握が言語の文法にも慣習的に組み込まれていると主張する。こうした言語観のもと、30年余りの研究で、文法や意味を記述する道具立てが整えられてきている（例えば、カテゴリー化や、図地分化、参照点能力、百科事典的知識に言及しながら、語や構文の多義性に関する研究が積み重ねられてきている）。また、言語の歴史については文法化や主観化をキーワードに、言語の起源については共同注意などの観点から論じられるようになってきた。

本プロジェクトは、英語・日本語・アジア諸語を中心に、従来は記述的・伝統的手法によって扱われてきた言語事実や隣接領域の進展により開拓されてきた事実を、認知言語学的手法によって解明することを目的としている。主として以下にあげる2つの観点から取り組むことで、認知言語学の理論的発展の方向性を探る。

第一は、伝統的・記述的アプローチで積み重ねられてきた研究に目を向けることである。認知言語学は、北米を発祥地とするがゆえに英語中心に研究の枠組みが作られてきた傾向があるが（対立する生成文法が英語を中心に議論が重ねられてきたことも関係している）、他言語の細かなデータやその研究で開拓されてきた方法論を参照することにより、新たな進展が期待できる。とりわけ、日本語研究においては、伝統的な国語学の研究と近年進展が著しい日本語史の記述的研究の両者が、日本の認知言語学界においてさえ吸収が遅れている。また、フィールドワークを通して明らかとなった「マイナー言語」の事実も取り入れが遅れている事項である。第二は、認知言語学の隣接領域と呼ばれる分野の研究成果を組み込むことである。実験的手法による心理学的研究や、コーパス分析をもとにした統計学的な研究などがその中心となる。

そこでプロジェクト1年目は、研究分担者・協力者間で認知言語学および隣接領域に関する文献を収集・共有し、ゲスト講師も交えた研究会を頻繁に開き議論を重ねることで、認知言語学内部の問題点を洗い出し、他分野との対話の可能性を模索するように努めた。10月は「フィールド言語学と認知言語学」をテーマに、北米の少数話者言語や、シベ語、タガログ語、バスク語の特徴を見た上で、それを認知言語学の枠組みで記述するとどうなるか、その利点は何か、英語を通した理論化では抜け落ちてしまう視点は何か、といったことを議論した。人間言語に普遍的に見られる特徴と個別言語特有の特徴の両方を扱える枠組みをどのように構築していくかは、認知言語学にとっても重要な問題の1つである。12月の研究会のテーマである「レトリック・多義」は、認知言語学の最初期から注目されてきた現象であるが、今回は、辞書記述、教育、言語遊戯との関連を扱った発表であった。そういった他分野との対話を通して、新しい研究テーマ、方法論が見えてくるだろう。3月の研究会テーマは「コーパス言語学と認知言語学」である。電子コーパスの登場以後、量的な分析が容易にできるようになり、認知言語学でもコーパスを利用した研究が増えてきた。3月の研究会では、構文（交替）や事態把握をテーマに議論するとともに、コーパスを利用する上で注意すべき点も共有した。

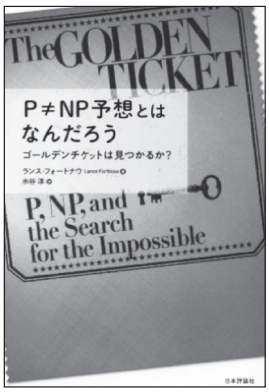
今後は、日本史学、中国語学などの伝統的・記述的な言語学や、関連性理論などのほかの言語理論、認知（心理、知覚等）にかかわる言語学以外の学問分野からの講師も招き、研究会を開催する予定である。認知言語学の重要概念の有効性、問題点を検証し、他分野からの知見も積極的に取り入れて、認知言語学の新たな研究の展望を打ち出したいと考えている。

CAPSの共同研究プロジェクト（3年）・パイロットプロジェクト（1年）について、随時紹介文を掲載しています。

書 評

ランス・フォートナウ著「P≠NP予想とはなんだろう」

理工学部准教授　山本 真基



数学の問題に懸賞金がかけられているものがあることをご存知だろうか？ミレニアム賞問題といって、2000年、アメリカのクレイ数学研究所より発表された七つの問題がそれである。（ちなみに、一つの問題につき100万ドルの懸賞金がかけられている。）そのうちの一つ（ポアンカレ予想）は、ロシアの数学者であるグリゴリー・ペレルマンによって、2002年とその翌年に発表されたプレプリント（査読なし論文）で解決された。残る六つの中に、P対NP問題（P≠NP予想）という理論計算機科学分野の未解決問題がある。これを一般向けに分かりやすく説明したものが本書である。

本書の原題は、「ゴールデンチケット」である。ゴールデンチケットとは、2005年製作「チャーリーとチョコレート工場」という映画（ティム・バートン監督、ジョニー・デップ主演）に登場する、チョコレート工場の見学ツアーに参加できる当たり券のことである。映画では、ある日、チョコレート工場長を務めるウィリー・ウォンカが全世界へ次のように告知した。「生産するチョコレートバーの中に金色のチケットを五枚だけ同封した。それを引き当てた子供には、家族の一人を同伴で工場を見学する権利が与えられる。更に、そのうちの一人には大金が付与される。」世界中がチケット争奪で大騒ぎとなる中、お金持ちの子でわがままなお嬢様ベルーカは、実業家の父親に頼んで、手に入るだけのチョコレートバーを買い占めてもらった。ただし、チョコレートバーが山のようにあっても、その中に金色のチケットがあるかどうかを確かめなければならない。この作業を父親が経営する工場の従業員にさせ、数日後の晩、幸運にもゴールデンチケットを見つけ出すことができた。

年間数千万個生産されるチョコレートバーの中には当たり券がたった五枚しかない。もし、チョコレートバーをデジタル化してデータベース化することができたなら、現在のコンピュータを使った場合、一秒もかからず（当たり券のあるなしを）確かめられてしまう。といったように、本書では、デジタル版ゴールデンチケット探しを題材に、数多くある候補の中からある特定の希少のものを見つけ出すという（日常的によくある）探索問題を引き合いに、読者をP対NP問題の入り口へ導いている。

では、「探索」というのは、このような「検索的」な探索ばかりだろうか？例えば、アメリカの州都を訪問する巡回路を考えてみよう。（といったように、本書でも、典型的な導入事例「巡回セールスマン問題」を用いて、読者をP対NP問題の中心へと導いている。）州都がn個あればおよそn!（nの階乗）通りの巡回路が存在する。この中から最短な巡回路を見つけ出すという探索問題は、先の検索問題とは大きく異なる。明示的に与えられたデータを検索するというのが前者である一方、問題の考えられうる解を探索するというのが後者である。（チョコレートバーが巡回路に、ゴールデンチケット付きチョコレートバーが最短巡回路に対応する。）このような探索問題は、これ以外にも、分割パズル問題、クリーク問題、最短経路問題など、現実社会のいたるところで見受けられる。

Pとは、効率よく解を見つけ出すことができる問題。NPとは、与えられた解が合っているかどうかを効率よくチェックできる問題。先の例では、最短経路問題がPで、巡回セールスマン問題、分割パズル問題、クリーク問題は、NPの中でも最も難しい問題である。P≠NP予想とは、例えば、巡回セールスマン問題が「どのような方法を用いても」効率よく解けないという予想である。

著者はアメリカのジョージア工科大学計算機科学部教授で、専門は計算の複雑さの理論とその経済学への応用である。彼が（研究仲間のビル・ガサーク教授と共同で）発信するブログ[1]も有名である。本書は、コンピュータサイエンスを専門とする学者一般向けの記事［2］を骨組みにして書かれた。その記事は、それまでに同雑誌に掲載された記事の中でダウンロード数が最多になるほどの反響であったようだ。それから遅れること数年、日本でも、数学セミナー［3］にて同じテーマで特集が組まれた。記事［2］の反響と同じく、雑誌の売れ行きはかなりよかったようである。（数学に興味のある人々のP対NP問題への関心が高いようである。）

［1］ http://blog.computationalcomplexity.org/
［2］ Lance Fortnow, The status of the P versus NP problem, Communication of the ACM 52(9) : 78-86, 2009.
［3］ P ≠ NP 予想最前線、数学セミナー（626 号）、日本評論社、2013。

CAPS研究員 研究内容紹介

リスク社会における社会的不平等の行方

CAPS客員研究員　川端 健嗣

私の専門は社会学で、研究テーマはリスクの観点から社会的不平等を分析することです。社会学には「時代診断（Zeitdiagnose）」という分野があります。古くはマックス・ヴェーバーの近代化論のように、「合理化」のような特徴的な原理に着目して、社会秩序や時代の変化を読み解こうとする分野です。

1986年にウルリッヒ・ベックというドイツの社会学者が、現代社会を「リスク社会」と名付けました。同じ1986年にチェルノブイリの原子力発電所の事故があり、ベック氏の『リスク社会』という時代診断の書（邦訳『危険社会』）はドイツでベストセラーとなり理論実証の双方の研究に様々な影響をもたらしました。

社会学では「リスク（risk/Risiko）」を「危険（danger/Gefahr）」と区別して定義します。簡単に説明すると、人間社会の外部からやってくると認識される未来の損害を「危険」、人々の選択や決定によって生じると認識される未来の損害を「リスク」と定義します。

かつての「灌漑やペストや大飢饉」は、自然や神によってもたらされるものとして、人間に選択の余地のない未来の損害でした。したがって人々が「危険」に直面していた時代と理解することができます。

しかし比較的近年のチェルノブイリの原子力発電所の事故や金融危機やテロは、私たち人間の選択や決定によって引き起こされる未来の損害です。科学技術の発展は私たちに未来の選択を可能にし、一方でそれらの選択が未来の損害も引き起こしていることが認識されるようになってきました。つまり未来の損害は私達の選択や決定如何によっては回避が可能であるというリスクの認識が高まってきたということです。

こうして私たちは外部からやってくる未来の損害に対峙する危険社会ではなく、私達の選択や決定によって生じるリスク（認識）社会に生きるようになっています。日本では近年、福島の原子力発電所の事故がはたして＜天災＞なのか＜人災＞なのかの議論がありました。この区別は社会学の危険とリスクの区別に対応します。損害を事前に回避する選択の余地が私たちにあったのかなかったのかをめぐって、なかったのであれば天災、あったのであれば人災だという＜危険/リスク＞と同様の分類が争われています。

社会学のリスク定義を用いることで様々な洞察が可能になりますが、社会科学の研究において重要な展開の一つが「社会的不平等」の問いです。

社会的不平等は資源の不均等分配を問う研究分野です。学説史において社会的不平等研究はJ.J.ルソーの『人間不平等起源論』（1755）に始まるとされています。ルソーの時代に社会的な不平等が発生したという変化に拠るのではありません。ルソーが自然による不平等と人為による不平等を区別した認識上の変化を根拠としています。

人間関係の不平等はむろんルソー以前から存在していました。例えばアリストテレスの時代には「奴隷」と「自由人」や男女差の不平等は自然による産物でやむをえないものだとする記述が残っています。他方でルソーはやむをえない「自然」の不平等と、人間の営みによってもたらされた「社会的（モラル）」の不平等を区別しました。そして人間の営みによってもたらされた不平等は自然や神が定めたものではなく、元々無いはずのものだったのだから、なぜそのような不平等が生じているのかを解明しなくてはならないとして『人間不平等起源論』を展開しました。

ラルフ・ダーレンドルフという政治学者は、ルソーの区別を歴史上の「政治的革命」と評しました。ルソーの区別は、あらゆる不平等を自然のものだから仕方がないと片づけることを許さず、人間関係のヒエラルヒーを根本から再考することにつながるからです。

ダーレンドルフが「革命」と評した区別の形式は危険とリスクに当てはまります。未来の損害はこれまで自然や神の産物であり、その損害を誰が引き受けるのかという問いは、選択の余地がない問題化の困難な対象でした。しかし現代では地震という自然災害の代表的な事象でさえも人間の営みによっては回避できたかもしれない「リスク」として認識されるようになってきています。つまり人々の営みによる社会的な損害として未来の損害を扱うことが可能になってきたということです。

ウルリッヒ・ベック氏は社会的不平等研究の新たなパラダイムをリスクの分配であると主張しました。私はベック氏の議論に共感を覚えます。一方でベック氏の問いは具体的にどのようにリスクの分配を分析すればよいのかという手法や理論的枠組が定まっておらず、1980年代以降に30年以上も論争が続いています。

私の目下の研究課題はリスクの分配問題の分析枠組を提示することです。未来の損害が選択や決定によって生じているならば、その選択肢の分配の不均等を問う分析枠組が必要です。日本では自己決定・自己責任論のように決定が可能であるならばすべての帰結をその人の決定によるものと解釈する言説が流布しています。しかし損害を回避するための可能な決定の量もそれによって生じる帰結の責任の量も不均等であり、誰にどれほどの決定可能性と不利益の責任が分配されているのかというバランスシートの歪さを集合的に問い直さなくてはなりません。決定による帰結が本当に個人に拠るものなのかそれとも集合的に被っている不利益なのかを弁別する分析枠組がリスク社会における社会的不平等の行方を理解するために必要だと考えています。

アジア太平洋研究センター（CAPS）活動報告（2015.12.16 ～ 2016.3.15）

公開講演会、研究会、研究出張などの記録

◇12月18日（金）センタープロジェクト国外出張（22日まで）
出 張 者：佐藤 義明（法学部教授）
調 査 地：ドイツ
目　　的：資料収集のため

◇12月20日（土）研究会 「認知言語学の新領域開拓研究―英語・日本語・アジア諸語を中心として」
講 演 者：野田大志・有薗智美・小松原哲太・籾山洋介
参 加 者：13名

◇1月22日（金）センター国内出張（31日まで）
出 張 者：上原 こずえ（アジア太平洋研究センター特別研究員）
調 査 地：沖縄
目　　的：資料調査・収集及び取材対象者への聞き取りのため

◇1月25日（月）センタープロジェクト国外出張（28日まで）
出 張 者：湯山 トミ子（法学部教授）
調 査 地：中国
目　　的：資料収集のため

◇2月5日（金）センター国外出張（21日まで）
出 張 者：田浪 亜央江（アジア太平洋研究センター主任研究員）
調 査 地：イスラエル
目　　的：資料収集のため

◇2月9日（火）センタープロジェクト国内出張（11日まで）
出 張 者：小林 盾（文学部教授）
調 査 地：愛媛県
目　　的：愛媛結婚支援にて共著論文の分析を行うため

◇2月15日（月）センター国外出張（22日まで）
出 張 者：上原 こずえ（アジア太平洋研究センター特別研究員）
調 査 地：アメリカ
目　　的：資料収集のため

◇2月17日（水）ドキュメンタリー上映会　ラダック　それぞれの物語　ギフト
講 演 者：奥間勝也・岡田有美子
参 加 者：26名

◇2月22日（土）ワークショップ　傷・身体・反暴力の政治思想　岡野八代の著作をめぐって
講 演 者：岡野八代・五野井郁夫・趙慶喜・林みどり・三浦まり
参 加 者：54名

◇2月27日（土）ワークショップ　東アジア映画における「アメリカの影」不／可視の文化ヘゲモニーを探る
講 演 者：廖咸浩・南相旭・大田信良・鈴木英明・David Humphery
参 加 者：36名

◇2月28日（日）ワークショップ　東マレーシア・キナバル山の麓からパンクロック・スゥラップを迎えて
講 演 者：Rizo Leong・細谷修平・山崎雄史
参 加 者：48名

◇3月2日（水）研究会　The economic impact of immigration: the case of Italy
講 演 者：Ivan Etzo
参 加 者：11名

◇3月5日（土）書評会　『出来事の残響 原爆文学と沖縄文学』に触ながら
講 演 者：小野百合子・崎浜慎・土井智義・持木良太・松田潤
参 加 者：27名

◇3月16日（火）センタープロジェクト国内出張（17日まで）
出 張 者：長谷川 明香（アジア太平洋研究センター特別研究員）
調 査 地：愛知県
目　　的：第5回認知文法研究会に出席するため

2015年度運営委員会・所員会議開催の記録

1月15日（金）　第5回所員会議
1月19日（火）　第5回運営委員会

CAPS Newsletter No.130
2016年4月15日発行
編集発行：成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633　武蔵野市吉祥寺北町3-3-1
☎　0422-37-3549（ダイヤルイン）
FAX　0422-37-3866
E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp
Web: http://www.seikei.ac.jp/university/caps/